

63 九州大学耳鼻咽喉科学教室初代教授 久保猪之吉の業績

—第1報 “同門の語り” にみられる久保像—

丸山マサ美¹⁾, 小宗 静男¹⁾, 吉田 眞一¹⁾
下川 元継²⁾, 副島 忠弘³⁾, 末松 孝文³⁾¹⁾九州大学医学研究院, ²⁾九州大学病院, ³⁾九州大学医学部医学科

九州大学耳鼻咽喉科学教室初代教授 久保猪之吉の二代目の笹木実先生の終り頃の門下生A氏は、親子共に、直接的に久保先生との縁がある。主として三代目教授の河田政一先生の教えを受けたもので、孫弟子に当たる。その回顧によると、当時の教室には、前教授時代の教室の雰囲気と同様、久保時代の歴史が残っている。当時は、同門会開講記念日や地方会には、まだ多くの久保門下生が健在であり、久保先生時代の“しきたり”を熱心に語っていた。そのような事で、A氏も、その“しきたり”をよく聞かれた。初代教授久保猪之吉への深い想いは、一人一人の胸にいつまでも「何か」が伝わっていたと言う。

本稿は、平成23年9月5日、九州大学耳鼻咽喉科学図書館にて、門下生A氏のご子息に本研究における目的と方法について、十分に説明を行い、書面による同意書を得て、“初代教授 久保猪之吉の人間像の語り”をまとめたものである。

先行研究である同門会誌“四三会誌”に見る久保像のみならず、田中一弘（九州医専教授／開業）や岩熊哲（内科医／久保へ私淑／医史学者）の書に見る久保像をまとめた。久保猪之吉、通称“*Inokubo*”は、四三会誌（九大耳鼻科同門会誌）に書かれたものを見ても、その折々、門下生に愛され、慕われたことがわかる。久保猪之吉は、ドイツ留学の場でも、その生真面目な性格と、学問や研究など、仕事上でも極めて自ら厳しく律していた。そして、その厳しさは、後には“絆”としての「楽しみ」、「喜び」になった。教室の昔噺ではあるが、会合の終わりには、必ず「なんでイノちゃんが忘らりょうか」と当時流行の歌謡曲の文句を変えた戯れ唄を大合唱される（四三会誌）。

久保猪之吉の出身地は、東北・福島県・会津二本松である。初期の愛弟子・大藤敏三（日本医科大学名誉教授／九大 大正15年卒／医博／元日本耳鼻咽喉科学会理事長）著「「恩師・久保猪之吉とその短歌・雷」会の盛衰」一生涯立ちから壮年期頃までを中心として」（学士会会報 1987-1, No. 774, P71～80）と、佐尾裕子の近代文学研究叢書第45巻／昭和女子大学刊／所載の「久保猪之吉」から、出自・幼少年時代・青年時代が理解できる。これによると、特に、短歌の論説は数が多い。東京大学医学部学生時代よりの落合直文との出会いや短歌への傾倒の様子が、よく分かる。落合氏との繋がりや氏への敬愛は久保の文章にもよく表れている。そして、後々多くの出会いがあり、特に、“夏目漱石”や「より江夫人（久保の妻）」ご縁で“正岡子規”や“高浜虚子”との繋がりや“長塚節”との繋がりがあった。これらの人々との縁も、いつまでも大切にする人物であった。

幼少期の体験、特に戊辰戦争での叔父上方の二本松少年隊への参加、悲劇・非情の経験からの強い精神力育成や古風な古武士の面影にひそむ細かい人情（大藤論文）、その人情を感じずる人々への末永い交遊の様子が久保猪之吉の人生観を飾っている。短歌革新運動の先頭に立っての尽力な様子は、著作などに見られ、大変な熱心さであった。久保猪之吉の目指した耳鼻咽喉科の医師像の伝承は、「久保最終講義録（久保教授最終の臨床講義（昭和9年12月13日）」と題して、九州大学総長が臨席して催された演題“臨床医家に必要なる要素”附標本及び“患者供覧”九州大学医報出版部委員のもて行なわれたなかで、明らかに示されている。これは九州大医報の旧版に詳しく記されている。

本報告は、平成23年度 科学研究費補助金（課題番号）23650563（研究題目）九州大学医学部における史料研究—新しい「医の倫理」教育方法論の構築—の一環である。

（注）「久保最終講義録」の原文は久保猪之吉著 久保護躬校訂「臨床耳鼻咽喉科学」克誠堂出版（1940年版）の末尾に全文掲載されている。